

## 青い非常階段

安部孝作

「月は振り子のように

月は振り子のように、振れて  
振れ、

車中、わたしは

見果てていた、

ゆらゆらと

そして

首

ゆさぶられて

月はとまる

紺の夜空に突き刺さる

たまこの化石

みずからみえぬようにと

する彼方の輝きに温められた

そして潮の満ちる夜、

きいろく濡れた

嘴はひびをうち、からを穿ち

力にみちた

刃先のような

声で――

声で叫び

世界を

かき混ぜ始める――  
そして混ぜられた夜  
電車は  
遠心力を  
捨て去つて、直進した

つるされた巨大な  
磁石の輪

輪を月の鳥がつらぬき  
とびさり

わたしは直面し  
寄せられていく

我が肉体に流れるこまかな  
血漿が混ぜられていく  
回転する両極  
わけへだてられる  
わたしとわたし  
遠くへと飛び去る

振り子の糸は切れ  
月は振れて、振れ  
離れゆく  
遠くへと  
飛び去る

月の鳥は  
彼方のありかを知っている  
そしてわたしも  
切符にかかれた  
駅がくるまで

直進する電車に

のり

彼方へととんでいく

離れゆく

## 二 暗夜走行

ブルーインク山麓、秋

青焼けの紅葉

紅黄の夕焼け横目に

走り進めよオートバイ

ひじ曲げる山路の筋隆なるを

乙女ならしきピロードの

こっぺん こっぺん

に似るエンジン音

粗整備アスファルト

の凹凸超える

みちばたで標識は赤い夢み

畝辺の山茶花 青萼より飛び放たれ

どっこへまで延びるか山の舌

この先は口か胃腸か

うととうとぎしぎし

奥歯が軋む暗夜走行

高圧鉄塔、ペン先突き刺さり

呑みあう雲に  
ブルーインク染みるのを横目に  
さあ、走り抜けよオートバイ

### III そして蛾は生まれ

布団はだけ  
腹が冷え痛んだ早朝  
トイレ行つて  
また布団はいり  
左手伸ばしカーテン開く

ああ、  
なんて晴れがましい空  
まだ朝焼けなのに  
はやくも

暗転するほどまばゆい世界

世界はこよりはやく廻っている  
時は、空は、より早くあかるく  
それは誰に確かめなくとも  
既にわたしが知っている事実

その晴れがましい空に  
ふたつの繭玉のような純白の雲  
ぶかぶか小刻みに揺れ  
ほのかに桃色に染まっている――

ふたつの繭玉のような雲は  
糸を引かれ  
引かれるようのび  
解かれて穴をなし、

わたしはそこに大きな  
流れをみる――

まわり

突きぬけ

しみだしていく

流れ

――そこへ

一機の黒い飛行機が横切る

ああ、

腹が痛すぎる

ふたつの雲は

共謀する

巨大な力に圧迫され

変形し形作られていく

ああ、

腹が痛すぎる

身体をよじらせるほど

冷や汗もたらたらで、

だから

わたしはまた眠ることによろうと思った

と、丁度太陽が隠れた

そしてなにもかが窓を叩いた

眠るんだから静かにしてくれよ

わたしは無視した、が

ひびは止めどなく、

漏れ出された

そして蛾は生まれ

真っ赤な鱗粉が無尽蔵に窓を叩き

地表、

そして街を覆った

けざやかな音が鋭角に飛翔するなか

耳を塞いだところで

わたしは決して

眠れなどしなかった

## Ⅲ 眠れぬ夜

瞬時に切り替わる裏と表

巨大な網膜は焼けるまで見つめ

色彩の漏洩を心配していた

残像は消えようもない

その間危険が姿を消し始めた

階段の壁面に埋めこまれた

予言に満ちた設計図

油のなかで保存された

とけかけた写真  
音もなく彗星は飛来し  
語り始める人々  
展開していく雲の平手が  
横暴に弾いて 泡とともに  
吹き飛ばされる千億の王冠  
その中でふたりが視線を交わし  
言葉交わさぬうちに駆けだし  
別れるふたり  
同時に警報が鳴りだす  
のみこむようにあがる歓声  
そして瞬間にして訪れた静寂

## △ のこりつづける

足許に落ちゆく髪の毛  
部屋のかた隅に  
溜まる  
ほこりにまみれる  
わたしの身体の一部だったもの  
サッパリと掃除されて  
無くされていく  
塵芥の如く  
消されていく  
昔にわたしだったという事  
せめて火にくべて下さい

残り続けるために  
とこしえに彷徨う  
蓮華になつて  
泥に眠つていたのです

## Ⅴ 住処

住処のない貧しき  
僕はどこへ行くのか  
その赤シャツを着て  
清き食事を輝く食卓  
へ運び 頂こう この肉体  
が住処を奪うのだ そこには  
僕の住処があつた はず その  
食卓に 僕の席とお皿があつた はず



住処に与える者は虫に  
求める その美しさを 輝く  
貧しさを 色彩豊かな硬い殻の中で  
眠る 熱の籠つた息で満ちた 路上で眠る術を



禿げた大地の硬い皮膚  
そこから突き出た草草を覗くと  
白い骨にも住処があると



思い知るのだ……

立ち枯れた枝よ

住処を一つ示してくれないか

色あせた一時停止の標識よ

お前の足許を借りてもいいか

まだ見ぬ住処よ

お前はいつまでも

空けられたまま

空き瓶の口が笛吹くように

どうかお前も鳴らして

僕の名の在処を教えてください



花の中住処とする

ぬくもりのない虫たち

なにを食ってもいい

どこにも住処がある

お前たちはつやつや輝く――

僕は羨ましく思う

軽く潰されるお前たち

蛙にも吞まれてしまう

されどお前たちには

胃袋にも住処がある

に外ならない

僕には何が――

僕には墓穴がある……

茨の絡んだ墓穴がある

### Ⅲ 白犬

白犬が 歩みを止めた  
気付けば 灰に薄汚れ  
舌を出していた  
伏せつて今はだるそうに  
鼻をしゅうしゅうならしている  
通り往く人が呼ぶ ここへおいで――  
だが犬はちかよらない  
荒々しい声さえ出ない  
眼脂は固まつて  
琥珀色に光っていた  
誰も気づかなかつたが  
蠅に覆われていた  
ようやく葬られる時には  
その犬はしゅうしゅう煙をあげ  
真つ白に燃えた

### Ⅳ マンホール

朝ぼらけの大都会  
マンホールの下で小舟が  
とまった――  
舳先が何かにぶつかった  
命じられた子どもらが  
ランタンを差し向けると

白かぶらのような  
水死体

彼らは欺かれたのだ  
滑りゆく人影に  
浮遊する飛行船に  
むかし読んだ教科書に

命じられた子どもらは  
權で払い除けようと  
中身をながしきった  
病んだ卵のような腹をついた

彼らは奪われたのだ  
奪えるものは奪うようにと  
告げる言葉に――  
最後に宿った眼光まで……

そして陽が昇る  
マンホールの蓋が開かれる  
レンズを収めた子どもらの  
手もとで光が迸る

誰もいない  
静まり返った窓辺の街  
子どもらは知っていて尋ねた  
誰かいないのかと――

又 青い非常階段

亜鉛の剥がれ落ちた  
粉のちらばる踊り場

雨が降り込み蒼褪めるうえ

乾いた鳩のふんが白く

乾いて咲いた

黒ずんだエーデルワイス

なにが汚し汚されるのか

鴉は知らずに呑んで置き去りにした

海辺のビルの

非常階段は

錆がひどくて柱は折れそう

そこに作業着姿が一人

一段一段降りてきて安全靴は響く

カン……ケン……カン

どこか遠くへ行けそうな

ひらけた階段

手すりに鳩がとまり

雨空の下に腰下ろして

その人はなにも考えなかった

それを海とも思わず

黙って鏡に映った

くすんだ青ばかり見つめていた